

ハイドン：弦楽四重奏曲 第 38 番 《冗談》より 第 4 楽章

ハイドンが 1781 年に作曲した全 6 曲の「ロシア四重奏曲」（作品 33）は、音楽史的に見ても重要な作品で、モーツァルトがこの曲集に感銘を受けて「ハイドン・セット」（全 6 曲）を作曲したことも有名である。ロシア四重奏曲の 2 曲目にあたる第 38 番は、第 4 楽章のユーモアあふれる終わり方から「冗談」という愛称で親しまれている。

モーツァルト：ディヴェルティメント K. 138

1772 年ザルツブルクで、16 歳のモーツァルトは、K. 136～K. 138 の 3 曲のディヴェルティメントを書いた。不思議なことにこれら 3 曲はどれも 3 つの楽章しか持たず、メヌエット楽章すらないという、ディヴェルティメントらしからぬ楽曲だった。3 曲セットの最後を飾る本曲（K. 138）は、編成は 2 つのヴァイオリン、ヴィオラ、バス（チェロ）の弦 4 声に、急・緩・急の標準的な楽章配列を採用している。第 1 楽章アレグロは、強弱のコントラストが印象的な第 1 主題ではじまる明快なソナタ形式。中間のアンダンテ楽章は三部形式で、繊細な美しい旋律を聴かせる。ロンド形式の終楽章プレストはさらに加速して、軽やかに曲を閉じる。

ベートーヴェン：弦楽四重奏曲 第 13 番

1825 年から 26 年にかけて、ベートーヴェンは 3 曲の弦楽四重奏曲に取り組んだ。第 13 番（作品 130）、第 14 番（作品 131）、そして第 15 番（作品 132）である。ほぼ同時並行で作曲されたこれら 3 曲は、従来の 4 楽章形式からさらに進んで大胆な試みがなされており、（完成順に）第 15 番は 5 楽章、第 13 番は 6 楽章、第 14 番に至っては 7 楽章制となっている。

1825 年 11 月に完成した第 13 番は、初演では最終楽章に長大なフーガが置かれていたが、その長さや晦渋さを指摘され、小型のロンド楽章と差し替えられた。そしてフーガのほうは「大フーガ」（作品 133）として別個に出版されることとなった。

第 1 楽章は、序奏付きのソナタ形式。冒頭で奏でられる荘重な主題旋律は、楽章全体を貫く重要な動機となり、幻想曲のような印象を与える。第 2 楽章は、三部形式の短いプレスト。第 2・第 4 楽章は、各楽章をつなぐ間奏のような役割を果たしている。第 3 楽章は、美しく穏やかな三部形式の緩徐楽章。2 つの主題は、どこかおどけたような表情を見せてもいる。第 4 楽章は、アラ・ダンツァ・テデスカ（ドイツ舞曲風）。次楽章への橋渡しとして、優雅なレントラーを聴かせる。第 5 楽章は、単純な三部形式のアダージョだが、本曲の白眉である。「カヴァティーナ」とは、もともとは素朴な歌謡性をもつ声楽曲を指す。叙

情的旋律の極致とも言える美しさを湛えたこの楽章は、ベートーヴェン自身にとっても会心の出来だったようだ。第6楽章は、ロンド形式のアレグロ。上述の通り、初演後に差し替えられた楽章で、もとの大フーガと比べると約半分のボリュームだが、躍動的で愉悦にあふれた音楽となっている。